

県内各地で救護される野生動物...
 はたして『どんな場所』で救護されるの
 でしょうか?? わたし気になります!

「郡山市の住宅街でアオバトが保護されたそうです!」「そんな街中にアオバトが!?!」救護棟ではこんな会話が飛び交います。野生生物共生センターには県内各地から救護対象とする動物が搬入されますが、<動物が救護される場所>にはどんな特徴があるのでしょうか。治療を終えた動物の野生復帰の際、原則は救護地点近辺で放鳥/獣することとしており、救護地点の情報を記録しています。地理情報システム(GIS)という地理データを扱えるシステムを用いて、救護データを分析してみました。

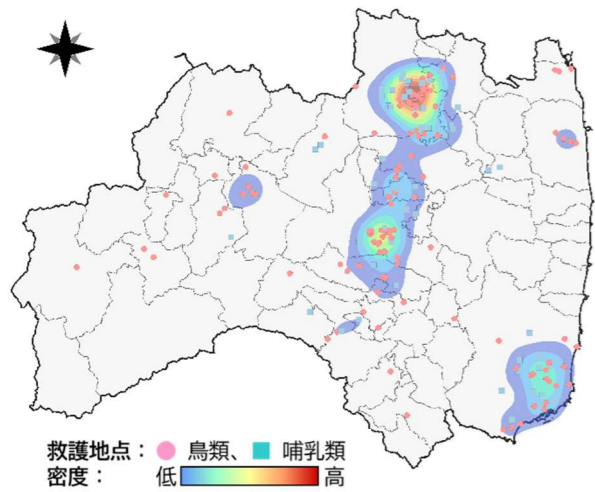


図1 救護動物の分布と密度(R5年度)

まず、令和5年度の救護データをポイント化して地図上に表示し、その密度分布をみると図1のようになりました。特に福島市や郡山市の市街地周辺、次いでいわき市沿岸部のあたりで比較的密度が高いことが分かります。意外に思うかもしれませんが、これは「生息する野生動物が多いため」ではなく、「人が多いため」と考えられます。傷病鳥獣を発見する人の目が多いこと、救護原因の大半を占める<建物への衝突>や<交通事故>といった活発な人間活動に起因する事故が起きやすいことで、結果的に人の多いところで救護される動物も多くなっていると予想されます。

少し詳しく、救護地点の周辺環境にも注目してみます。国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)提供のデータを使って、救護地点から半径1km内の土地利用(農地、森林など)の割合を調べました。救護事例が多かった種の平均化した結果を示します(図2)。先ほど触れたとおり、どの種も人工構造物(住居や道路など)が一定割合含まれますが、都市部でよく目にするドバトやスズメは特にその割合が高く、逆に二ホンカモシカやフクロウは森林が60%以上を占めています。これらはまさに動物の生息環境を示していることが分かります。

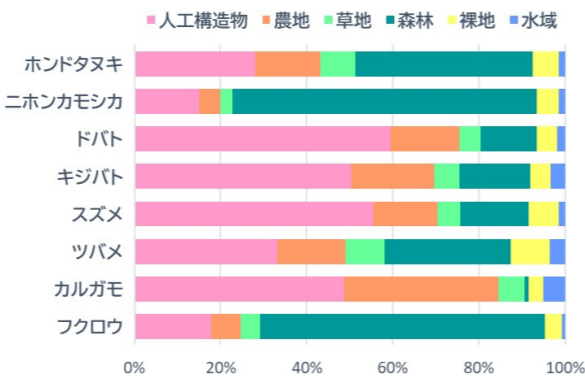


図2 救護地点の周辺環境(R5年度)

さて、冒頭で紹介した<アオバト>、青色ではなくオリーブ色がきれいな鳥で、県内でも夏鳥として少し標高の高い森林地帯で主に観察されます。そんなアオバトが救護されたのは10月初旬の市街地中心部。温暖な南方に渡る途中だったのでしょうか、普段生息しない市街地も渡りの経路に利用されていることが伺えます。救護データを眺めてみると、意外な場所で動物が発見されていることも分かり、情報の蓄積は将来的に調査研究への活用も期待されます。ちなみに、アオバトの標本は当センターでも展示していますので、ぜひ見に行ってください。



救護されたアオバト

※位置情報を含む個人情報については、個人が特定できない形で利用しています。

令和6年12月27日 福島県環境創造センター附属 野生生物共生センター

あだたら 森の回覧板



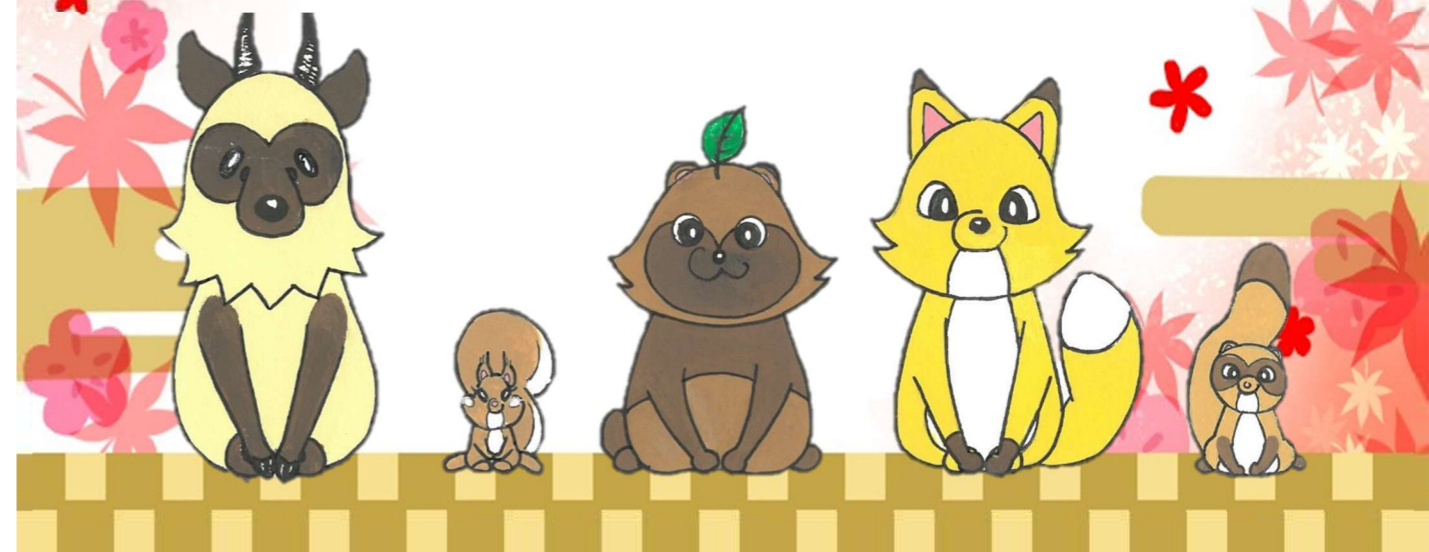
Vol. 27 冬号

コクマルガラスとミヤマガラス



謹賀新年

今年もよろしくお祈いします!



野生生物共生センターでは、野生動物の剥製やパネルの展示、映像放映等を行っており、入館料無料で自由に見学・閲覧できます。事前にご相談いただければ、団体でのご利用や職員による解説などの対応も可能ですので、興味をお持ちの方はお問い合わせください。

詳しくは... [HP](#) [環境創造センター](#) [検索](#)

発行: 福島県野生生物共生センター
 〒969-1302
 福島県安達郡大玉村玉井字長久保 67
 電話 0243-24-6631
 開館時間 9:00~17:00
 休館日 毎週月曜日
 (祝日の場合はその翌日)

本誌内の文章・画像等の無断転載および複製等の行為はご遠慮ください。



へびってどんな生き物？



今年の干支である「へび（巳）」について紹介したいと思います。へびは爬虫類の動物で細長い体が特徴的です。一般的に手足が無く、地面を這って移動しますがなぜ手足が無いのかわかっていません。一番有力とされているのは、地中にすんでいたトカゲの仲間から進化したという説で、地中で動きやすいように細くて長くなり、手足が無くなったとされています。

へびは世界中に広く分布している生き物で、日本には約 50 種類生息していますが、本州にいるへびはアオダイショウ、シマへび、ジムグリ、ヒバカリ、シロマダラ、タカチホへび、ヤマカガシ、ニホンマムシの 8 種類です。

このうち毒があるのは、ヤマカガシとニホンマムシの 2 種類で、咬傷を受けると重症化する場合があります。へびは基本的に臆病な生き物で、こちらから刺激しなければあまり襲ってくることはないため、へびを見つけても近づかないことが大切です。また、へびのエサとなるカエルなどが生息する田んぼの周りや川の周辺にいることが多いため、このような場所に行くときは注意するようにしましょう。



ヤマカガシ(上)とニホンマムシ(下)→

秋のワークショップを開催しました



秋のワークショップは 2 種。野外で落ち葉を拾い、押し葉っぱを準備するもの、完成した押し葉っぱを使って窓を彩るステンドグラス風の飾りを作るものでした。

普段は気づかなかった葉の色や形、色づき具合の違いに目を向けてみるとキレイで楽しかったと感想をいただきました。

みなさんが沢山集めてくださった枯葉を、また秋に活用させていただきます。



今年もあります！！

昨冬に好評だった“大人も楽しめる木の実を用いたワークショップ”を今年も実施中です。

2025 年の卓上カレンダーは小鳥たちが食事をしている様子がわかる「もぐもぐカレンダー」。カレンダースタンドを木の実でデコレーションするワークショップの利用者にプレゼントしています。かわいい小鳥たちを愛でませんか？

壁掛け用の大きいカレンダーもございます。



やがて哀しき外来種



はつひめ、ふくあかり、あかつき、まどか、ゆうぞらと並べば、．．．そう、桃ですね。これらの福島が誇る美味しい味覚たちに危機が迫っていることを御存じでしょうか。

右の写真はクビアカツヤカミキリという特定外来生物です。特定外来生物とは、海外起源の外来種であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業への悪影響が特に大きいとして法律で指定した生物であり、輸入、放出、飼養、譲渡し等の禁止などの規制がかかります。

成虫は 28～37 ミリで胸部が鮮やかな赤色、頭部と腹部は黒色で艶があり、麝香（ムスク）のような匂いを放つため別名クロジャコウカミキリとも呼ばれます。幼虫はバラ科の樹木（桜や梅など）を食し、特に桃を好みます。福島での発生は確認されていませんが、近隣においては群馬県（2015 年）、栃木県（2016 年）、茨城県（2019 年）で発生が確認されており、発生地では壊滅的な被害が発生しています。福島の美味しい桃を守るために水際対策が求められています。

このクビアカツヤカミキリの発見のヒントとなるのがカリントウ状のフラス（木くずと糞が混じったもの）です。幼虫は 4～10 月に樹木内部を食べて大量のフラスを排出し、そのフラスが樹幹下部や根付近に集まります。このフラスを発見できれば早期対策が可能なのです。

県では 2024 年 9 月に外来種を発見した際の報告フォームを整備しました。外来種の侵入、定着を防ぐためには早期発見が重要になってきますので報告フォームなどを活用し、外来種の発見、情報の集約に御協力いただければと思います。また、報告フォームに寄せられた情報を基にした外来種マップを公表予定ですので、私たちの暮らしのそばにどれくらい外来種がいるのか、知ることから始めてみましょう。

外来種が人に悪影響を及ぼす一方、外来種の立場から考えてみます。食用として運ばれたウシガエルやペットとして持ち込まれたアカミミガメなど、人為的な要因により導入されたものたちがいます。このような外来種は人間活動により異国に連れてこれる人の都合により害獣扱いされています。まさに行きはよいよい帰りは怖い。なんと哀しき境遇なのでしょうか。新たな外来種問題を発生させないために、外来種の境遇に想いを馳せ、人にできることはなにか考えてみてはいかがでしょうか。

図1 クビアカツヤカミキリ



図2 フラス



図3 フォームに報告された情報を基に作成した外来種マップ



報告フォーム URL⇒⇒⇒

